



京都大学 川上浩司 先生

京都大学工学研究科卒、同大学院修了。生態学的システム設計や不利益を研究する、京都大学デザイン学ユニットの特定教授。また、「不利益システム研究所」代表者でもある。『京大式DEEP THINKING』（サンマーク出版）『不利益-手間をかけるシステムのデザイン』（編著（近代科学社）など著作多数。

社会を“という時の便利って、多くは“手間がかからない”とか“頭を使わなくていい”という狭い意味での便利なんですよね。もちろん便利の益もありますが、手間を



大学院の学生とプレストしながら、アイデア出し。

「例えば、京都大学のオリジナルグッズになった『素数ものさし』。『不利益な物づくり』をテーマに開発しました。1とその数字以外では割り切れないという素数が目盛りになっていて、それ以外の数をどうやって測ればいいのかを考えなければなりません。自分の頭で考えなければ答えを出すことができないという不便さが、実は益になるので

不便の益の一つだと思います。『不利益』の考え方から、実際に開発されたものもあると聞きました。

かけなくて済むこと、つまり人が何もやらなくて済むようになることは、逆にいえば自分の好きなようにできなくなるといことではないでしょうか。不便だからこそ、手間をかける。自分でやってみて時には失敗したり、新しい発見があったり。それは、そこに自分が関わることができるとい意味での自己肯定感や、楽しむことにつながっていると思うんです。不便の中には、そんな不便もあって、『不便だからこいいこと』を京都大学の学生たちと最先端技術を使って研究してみようというのが、この『不利益』の研究なんです。」



学生のさまざまな研究作品。

自分にお湯がかからずに、インスタント焼きそばの湯ぎりをするために、遠心力を利用した作品。

川上先生ご自身は、どんなライフスタイルを大切にしていますか？  
「私自身の暮らし方は、それほど『不利益』を意識しているものではありませんよ（笑）。自分では普通のつもりです。腕時計

す。他にも、製品化はされませんでした。あるメーカーと共同開発を進めていたのが『消えるカーナビ』。一回通ると、通った道の表示が消えてしまおうというカーナビです。これも、自分の頭で道を覚えるようにするための不便さを考えました。ちょっと頭を使わなければいけないことを、うれしく感じる。そのおもしろさを知ってもらいたいです。」



「日常品を不便にする」という、サマースクールの題材から生まれた「素数ものさし」。